

良いコメントを書くために

1. はじめに

- 本発表の概要
 - 良い研究とは？
 - コメントを考える際の視点の例
 - 方法論、研究タイプによる違い
 - こんなことに悩むかしら・・・

※ 心理学の方法論：実験、調査、実践

研究タイプ：検証型研究、探索型研究 など様々 （詳細は配布資料参照）

最初からいろいろな方法論、タイプの研究を思い浮かべると混乱するかもしれない。

→まずは、(仮説) 検証型研究の実験を思い浮かべながら聞いていただきたい。

あとで、方法論や研究方法論による違いは言及する。

2. 良い研究とは？

- 南風原・市川・下山 (2001) より
 - 情動的価値：意外性
確実性
 - 実用的価値
- 市川研 OB, 村山さんと岩男さんのやり取りから (おぼろげなのですが)
 - 内的一貫性
 - 外的一貫性

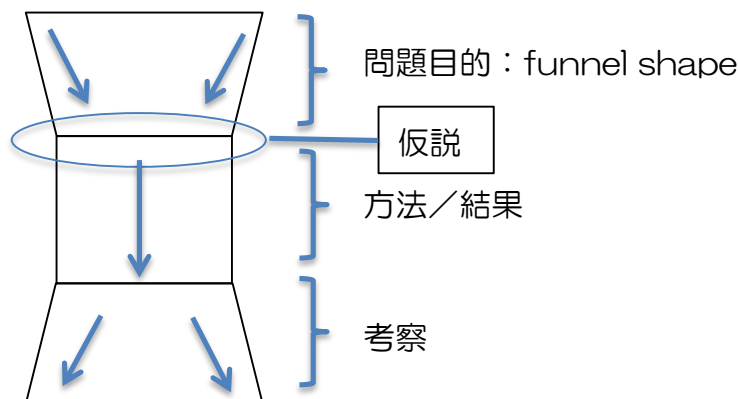


図1 良い論文の構成 (杉浦さんが市川ゼミで紹介した図を植阪が改変)

3. コメントを考える際の視点の例

- 問題・目的
 - (内的一貫性) 検証すべき仮説は明確か？
 - (内的一貫性) 仮説を導出するにいたるロジックは大丈夫か？
 - (外的一貫性) これまでの研究生との整合性は？
 - (情動的価値・実用的価値) オリジナリティはあるか？実用性は？

なぜその問いを検討しなくてはいけないのか、検討する必要があるのか？
検証に使おうとする方法は適切か？(詳細は“方法”で)

- 方法
 - (内的一貫性・確実性) その方法で、仮説は検証できているか？

※より詳細に：心理学の仮説は多くの場合、独立変数と従属変数からなる。
従属変数として測定しているものは測りたいものは測れているか？
独立変数として操作しているものは、想定している状況を表現しているか？

 - 仮説を検証する方法として適切かを判断するための情報は十分か？

- 結果
 - (内的一貫性・確実性) その分析で、仮説は検証できているか？
 - 分析結果の解釈は適切か？

※その結果は、本当に仮説によるものといえるか？
他の解釈可能性(特に、第3変数の可能性)は考えられないか？

 - 他の解釈可能性がある場合には、必要な追加的分析は行われているか？

- 考察
 - (内的一貫性・確実性) 仮説について、結果をふまえた考察が行われているか？
 - (内的一貫性・確実性) そのような結論で、問題がないか？
 - (外的一貫性) これまでの研究知見との整合性は？
 - (情動的価値) その研究知見の研究的・実践的意義は明確か？
 - (内的一貫性・確実性) 方法論や判断に限界がある場合には、そのことに言及しているか？

3. 方法論、研究タイプによる違い

- 探索型研究であっても、基本的には同じ。明確な仮説はないものの、調査や実験であれば、検証の目的があるはず。それに沿って考えていく。ただし、方法論が異なるのでそれ独自の要素も生まれる。例えば、調査研究における因子分析では、因子の解釈などが適切かなどといったことも問題になる。また、考察では、(冒頭で明確な仮説がない分)、単なる結果の羅列を超えて、研究や実世界に対する何らかの示唆が含まれているかについても検討する必要性が生じる。
- 実践研究については、研究者の何らかの目的に従って場を設定するというよりも、そこに存在する対象者のニーズに応じる形で研究が展開することことになる。ただし、研究論文にする場合には、その論文を通じて問うべき問いが設定されているはずである。それに沿って検討するという意味では、これまで述べてきたこととそう大きくかわるものではない。ただし、こうした問いが、実践という方法論でなければ問うことができないものであるのか(例えば、うまくいかなかった状況をどうのりこえていったかから、新たな仮説を生み出すなど)といった吟味は行われてしるべきであろう。(ただし、教育心理学研究などには、実践研究というジャンルに掲載されていても、必ずしもこうした観点から区分されていないことも少なくない。研究の目的の達成のために、学校現場を使っただけというものも見られる。それについては、調査や実験と同様に扱うことができる)。また、実践ならではのリアリティや、やってみたらこそ分かったことが含まれている知見のオリジナリティ、そして研究という文脈への位置付けなども求められる。こうした点が達成されているのかといった点からも検証することになる。

4. こんなことに悩むかしら・・・

- コメントが思いつかない！
問題目的だけを読んで、自分だったらどんな方法を考えるか？(これ自体は、私自身が修士時代に行ったトレーニング)など、自分だったらどうするかを考えてはどうだろう。実際に調査を体験した人のつもりになって、想定したプロセスが生じるかをシミュレーションしてみるなども有効ではないだろうか。
- コメントが多すぎる！
慣れてくると、良いと思って選んだ論文にもたくさん“アラ”が見えてきてしまう。言いたいことは大量！さて、どうするか。1つの解決方法として、優先順位をつけて言及することが挙げられる。複数大事な点を思いついて優劣がきめられない場合には、その論文が世の中で認められるにあたり、よりクリティカルなものを選ぶ。もしそれ

ほどクリティカルなものがないのであれば、その論文の面白い部分を、より引き立てるためにはどうしたらよいかなどを優先しては？

- (論文紹介の) レジюмеが短くならない
非常に丁寧に作ってくれる人がいるが、論文は全員読んでいる。メインはあくまでもコメント！ 思い出すための手がかりがあればよいと思って良いのでは。
- ただ文句を付けているだけのように見えてしまう・・・
こうすると良くなるという、代替案を！
- (おまけ) 教育研究なのだから、研究者のもつ価値観 (こんな教育が良い!) をもっと出しては? と思ってしまう。
出版されている論文にもいろいろな立場がある。何が良いということ进行全面に出さず、ニュートラルに書くタイプの研究者もいれば、かなり自分の価値観を全面に出す書き方をするタイプの研究者もいる。人により、賛否のあるところ。実際の査読ではなかなか踏み込みにくいところがあるが、せっかくのゼミの機会 (ある意味で自分の価値観を形成するところ) なので、もしそうしたことを全面に出した方が面白くよめるのに、というのであれば、どのような文脈化をすればもっと面白くなるのかの代替案を考えた上で提案してみると、コメントを聞いている人も楽しめる。
- (おまけ) 根本的に方法論から変えてしまう提案を思いついた。
実際の査読では、(とられている方法がそれなりに納得できるものならば) なかなか根本的な方法論の改善を提案することは難しいが、そこはゼミの良いところ。その論文で用いられている方法ではなぜ良くないと考えるのかを明確にした上で、もっと上手に検証する方法を提案してくれれば、聞き手も楽しめる。